

風景と時間に 寄り添う 公共建築



事務所から出石川を渡り永楽館に向かう福岡さん

城下町中心部の八木通りや本町通りでは、夕刻になると町屋の前で水が撒かれ、自然と人が集まる。夕涼みしながら言葉を交わすそんな何気ない風景が、今も鮮明に心に残っているという。

当たり前のように身の回りにあったその景色にはっきりと価値を見出したのは、建築士として独立した頃だった。一度は出石を離れ、広島で建築を学び、大阪での就職を決める。だが父の要望もあり故郷に戻り、設計事務所に勤務。約10年の経験を経て、1981年、30代前半で独立した。

ちょうどその頃、古い町並みが残る出石の景観に注目が集まりはじめていた。建築家の宮脇壇が斎藤隆夫記念館 静思堂や伊藤美術館を手がけ、出石の風土やスケール感を丁寧に読み解いた建築が生まれていったのもこの時期だ。まだ国レベルで景観に関する明確な指針が整う以前のこと。地域性を丁寧に読み取り建築に反映させるという姿勢は、決して主流ではなかった。だからこそ、そうした試みは確かに人々の目を引き、評価を集めていたのだ。

外からの視点に触れることで、偶然立ち戻ってきた自分の足元に、歴史や自然の豊かさがあることを改めて実感したという。「大事にしていかないと」。そう感じ、地域活動へと自然に身を向けていく原動力になった。

長い時間をかけて身体に染み込んだ原風景の記憶は、成長してから静かに輪郭を帯び、福岡さんを突き動かしていったのだ。

私財を投じた粋な芝居小屋は 町民の手で受け継がれた

永楽館のはじまりは、125年前の明治34年。染め物問屋を営んでいた小幡氏の芝居好きが興じて建てられた芝居小屋だった。

現代への復活を構想するにあたり、福岡さんは全国各地に残る芝居小屋を実際に訪ね歩いた。そこで見てきたのは、永楽館がもつ特異な立ち位置だったという。温泉地に見られるような豪華絢爛な装飾はない。使われているのは、当時手に入りやすかった杉材や、廃校となった小学校から譲り受けた窓。小幡氏の敷地の一角に、集められる材料を集めてつくられた痕跡が、いまま随所に残っている。

そこには、質素ながらも余りある意思があった。都市型の芝居小屋をつくり、町の大衆文化をみんなで楽しもうとした個人の覚悟。その想いは部材の選び方や造作のひとつひとつに滲み出ている。どう楽しもうとしたかが刻まれている。そこにこそ永楽館の本質的な魅力があると、福岡さんは感じたのだ。

60有余年で幕を閉じた永楽館は、しかし取り壊されることはなかった。小幡家、そして出石町民の手によって、大切に保存されてきたのだ。私財を私有に留めず、公共の場として差し出した小幡氏の振る舞い。その粋な選択は、時代を越えて受け継がれ、いままこの場所の在り方を静かに支えている。

大きな声に流されず 専門家として粋組みを捉え直す

1988年(昭和63)、まちづくり団体として『出石城下町を活かす会』が発足した。大工や左官といった職人、行政関係者、小学校教師など、立場を越えた町民有志およそ150人が集い、永楽館の復元を目標に掲げた。福岡さんも事務局として関わりながら、次第に会の中核を担う存在となっていく。

閉館から長い年月を経た永楽館は老朽化が進み、早急な判断が求められていた。しかし、現行の建築基準法のもとでは、木造の劇場は原則として認められない。RC造やS造といった耐火構造に置き換えるか、そもそも復元を断念するか。そうした声が大勢を占めるなかで、福岡さんは別の可能性を探っていた。

この建物を、その姿のまま未来につなぐ道はないのか。検討を重ねた末にたどり着いたのが、文化財として登録し、法の適用除外を受けるといった選択だった。文化

財登録への挑戦は前例も少なく、高いハードルが立ちはだかる。それでも福岡さんは、永楽館の価値を正しく伝え続ける役割を担い、結果として約20年にわたり、その歩みに伴走することになる。

当時、有識者の多くは、傷みの激しい永楽館を文化財として残すことに否定的だった。改修するならば、辰鼓楼のある町の中心部へ移築した方が観光資源として有効ではないか、という議会の意見もあった。

だが、できる限り当時の構造と部材を活かさなければ、小幡氏の心意気まで含めて継承することはできない。玉石の上に軸組を載せる伝統的な木構造はリスクが大きいとされ、より安全で手早い方法が提示された。それでも安易な置き換えに流されることなく、何度も県庁に足を運び、文化財登録の意義を粘り強く訴え続けた。



廻り舞台の木造の骨組み

転機となったのは、伝統木構法の専門家である増田一真さんとの出会いだった。土壁の強度が正当に評価されていなかった当時、数多くの伝統建築を見てきた増田さんの視点によって、木造であっても合理的にリスクを回避できる構造計算の道が拓かれた。その計算書は、永楽館の可能性を裏づける確かな根拠となった。

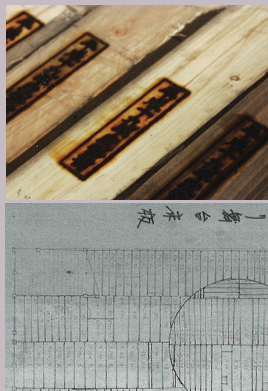
無理だという声が周囲を覆っていた状況のなかで、最後まで知恵を絞り、とことん向き合う専門家との協働が、道を切り拓いた。1998年(平成10)、永楽館は文化財として登録され、ようやく設計業務が本格的に動き出したのだった。



建築という教材を後世に いつでも過去へ立ち戻れる改修

改修にあたって福岡さんが一貫して大切にしたのは、手を加えた痕跡を曖昧にしないことだった。時代を経て付け足された不要な増築部分の撤去、失われていた棧敷や広間、木戸先の復元、腐朽した部材の修繕や構造補強。そうしたひとつひとつの工程において、後世の人が見て分かるよう、部材には修理記録を示す焼印を入れた。また、既存の梁の間に設けた水平ブレースによる補強も、取り外せば元の姿に戻せる方法を採用している。いつでもかつての状態で立ち戻れること。それが改修の前提だった。

その思想をかたちにするプロセスは、根気のいる作業の連続だった。例えば奈落に設置されている廻り舞台の床板ひとつとってもどこに



上:修理記録刻印が刻まれた部材
下:番付け図を作成し位置を記録

使われていたものかを把握するため、すべての板に番号を振って管理。大工



改修後の永楽館の舞台・観客席

チームとともに、文化財を復元するという意識を共有しなければ成り立たない工程が続いた。福岡さんは毎日のように現場へ足を運び、腐朽が進んだ丸太一本すら捨てることなく、丁寧に見極めながら作業を進めていった。

思想が、また誰かの判断を支える日が来るかもしれない。そのために欠かせなかったのが、職人との密な協働と、設計図と手仕事が噛み合うための仕組みづくりだった。

2008年に竣工を迎えた永楽館は、最も美しい劇場のひとつと称される空間として再び人々を迎え入れている。2025年公開の映画『国宝』の撮影舞台となったことも記憶に新しい。いま、永楽館はあらためて出石の顔として、その時間を重ね続けている。

建築を地域の教材にする 地元の山から生まれた中学校

出石の象徴ともいえる永楽館の改修だけでなく、福岡さんの地域資源と向き合う姿勢は、日常の設計業務にも一貫して表れている。2004年に竣工した、兵庫県豊岡市但東町の中学校の設計も、そのひとつだ。設計コンペの段階で福岡さんが提案したのは、地元但東町の山の木を内装材として使うことだった。

当時、地場の材木屋は次第に姿を消し、流通の主流は大手企業が扱う輸入材。地域材は価格も高く、扱いづらい存在になりつつあった。「あんな馬鹿な提案を受け入れてくださって有難い。今でも思い出すね」。そう振り返る福岡さん。当時の町長をはじめ、多くの関係者の理解と後押しによって、地域材を使った中学校建設が実現することになる。

但東町が管理する山に入り、一本一本の木を見て回り、採寸し、選定するところからプロジェクトは始まった。さらに、その伐採の現場には、およそ100人の中学生たちも参加した。自分たちが通う校舎の木が、どの山で育ち、どのように切り出されるのかを目の当たりにする経験。子どもたちの喜ぶ顔は忘れられないと話す福岡さん。地域の木材が、建築を通して、生きた学びへと変換されていったのだ。

こうして完成した校舎は、地元の山の木を内装に用い、外観には周辺集落に残る赤瓦の景観を踏襲している。その土地の風土や積み重ねられてきた風景を尊重し、無理なく重ねていく設計の姿勢。そこには、永楽館の改修と同じく、古さを読み取り、必要な手を静かに添え



ていく福岡さんの一貫した態度を見ることができる。

周辺環境に馴染むよう設計された赤瓦の校舎

長く愛されるために 解像度をあげる建築士の役割

普通の材を、普通に使って、普通に仕上げる。それが、福岡カラー。福岡さんと15年来の付き合いになる建築士事務所協会但馬支部の中村さんがそう語る。福岡さんの建築には、これ見よがしな柱や、思わず目を奪われるような意匠があるわけではない。「立派なもの、お金さえ出せば誰でもできる。本当に質素。蕎麦的というか、毎日食べられるような設計ですね」。地域を牽引してきた建築士に向けた、その言葉には静かな敬意がにじんでいた。

その言葉どおり、福岡さんはますます自然の成り行きに委ねる姿勢を大切にしているという。依頼主や使い手の声にじっくり耳を傾け、土地の条件や地域の気配を丁寧に読み取る。そうして積み重ねられた判断は、派手さこそないが、噛み締めるほどに味わいの増す個性として、建築の奥に残っていく。

1992年、福岡さんが出石町の景観を守るためにまとめた『伝統的町屋建築の意匠構成の手引き(町屋デザインマニュアル)』がある。精密で繊細な格子、虫籠窓と出格



伝統的町屋建築の意匠を読み解いた資料(町屋デザインマニュアルより抜粋)



福岡建築事務所 | 風景と時間に寄り添う公共建築

今でもメンテナンスの相談等を受けるという永楽館の前で

子窓の組み合わせ、装飾された腕木と持送板など、ひとつひとつは控えめでありながらどれもが出石らしさを感じさせる要素を丁寧に観察し記録している。それらを感じのままに留めるのではなく、建築士として読み解き、言語化し、誰もが理解し継承できる形へと整理している。その姿は、建築を“つくる人”であると同時に、風景を“翻訳する人”のようにも映った。

町屋デザインマニュアルを通して感じたのは、建築が個人の表現にとどまらず、個と他者、現在と未来をつなぐコミュニケーションツールになり得るかもしれないということだ。そこにある風景を丁寧に読み取り、解像度を上げ、共有可能な仕組みへと咀嚼する。その積み重ねこそが、借り物ではない風景を街に残していくことなのだ。

建築物を建てることだけでなく、地域の知や経験を公共財としてひらいていくこと。それは、建築士事務所協会が知と経験を共有し続けてきた、その営みとも重なって見える。福岡さんの実践から、建築士の仕事の輪郭が、静かに浮かび上がってきた。